

炎症性腸疾患

若年者に多く発生し、慢性に経過する厚生労働省『指定難病』である、潰瘍性大腸炎、クローン病の診療を積極的に行っています。

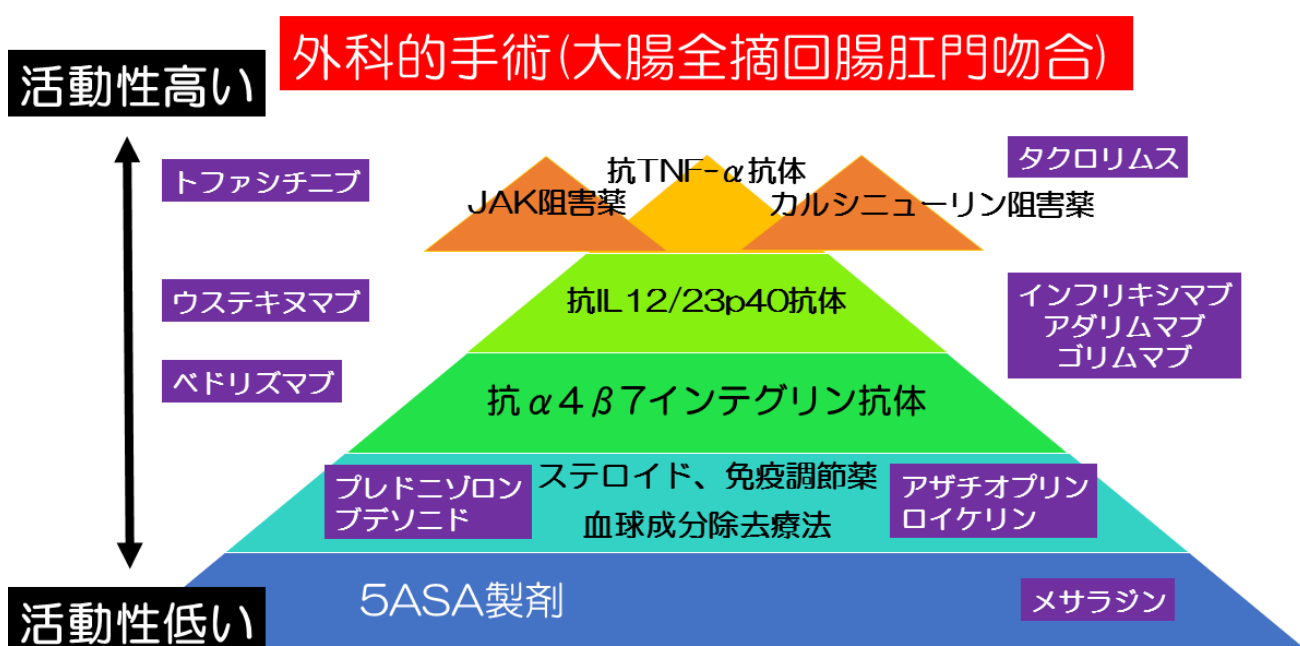
バイオマーカー(便中カルプロテクチン、LRG など)の検討を臨床に応用し、適切なタイミングで内視鏡評価を行い、生活スタイルに合わせた適切な治療の選択を、患者さんと相談しながら進めていきます。

適切な治療介入で、日常生活を健やかに、支障なく過ごしていけるように心がけています。

<潰瘍性大腸炎>

血便を伴う下痢や腹痛が、慢性に続く場合潰瘍性大腸炎の可能性あります。

原因不明ですが、大腸の粘膜が傷つき「びらん」や「潰瘍」を形成するため、症状が出ます。食事療法、規則正しい生活といった部分に加え、病状に応じた種々の内科的治療法があります。

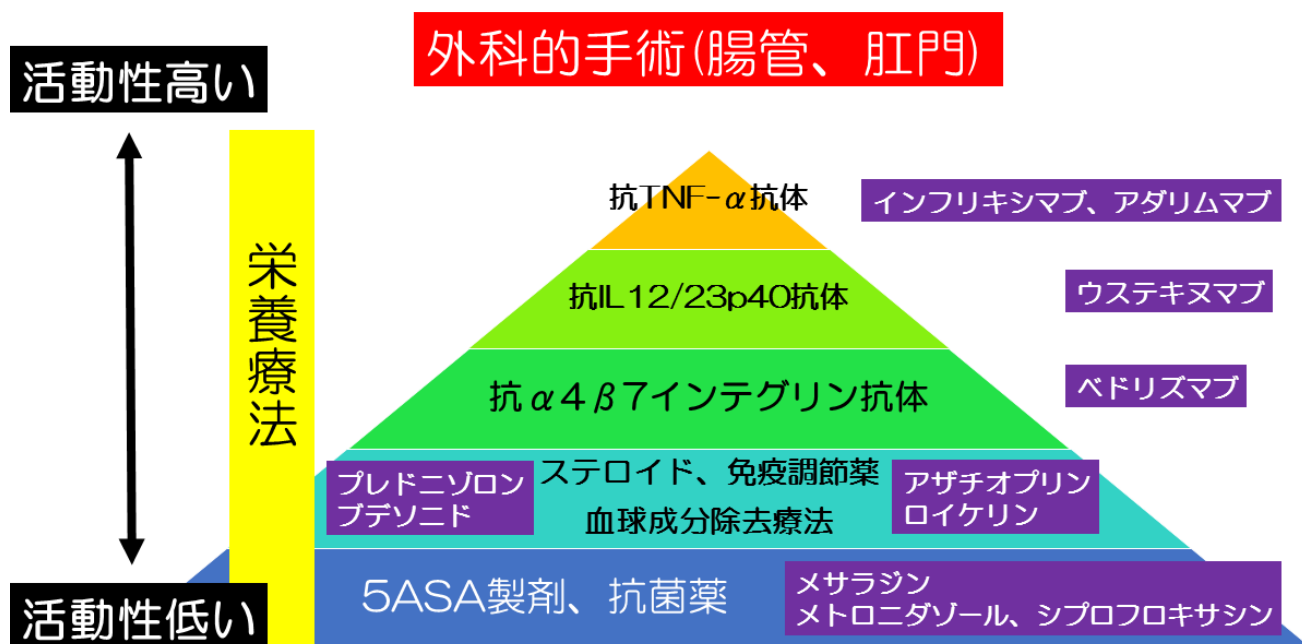


<クローン病>

主に腹痛と下痢を繰り返し慢性に続く場合、クローン病の可能性あります。

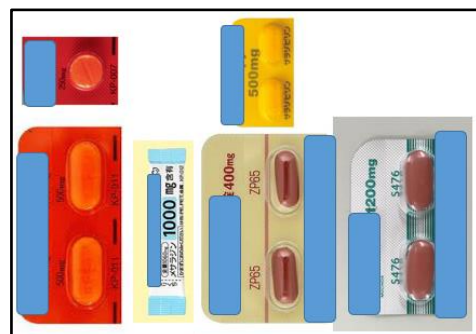
原因不明ですが、消化管の粘膜が傷つき「びらん」や「深い潰瘍」を形成するため、症状が出ます。病変は口から食道胃小腸大腸肛門のどの部分に出る可能性もあります。肛門周囲膿瘍や難治性の瘻で見つかる患者さんもいます

食事療法、規則正しい生活といった部分に加え、病状に応じた種々の内科的治療法があります。

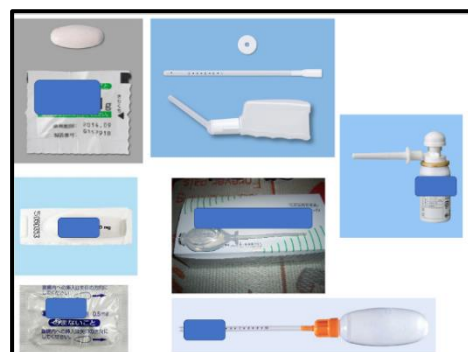


<内科的治療>

5 アミノサリチル酸製剤(5ASA) : 軽症～中等症の患者さんではこの薬剤を定期的に内服することで症状を抑え、日常生活に支障なく過ごすことが可能です。薬剤の特性の違いを考慮し、4 製剤を使い分けています。



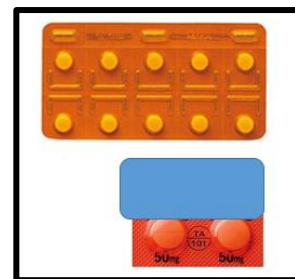
坐剤、注腸製剤(経肛門的治療) : 大腸に薬剤を十分に投与する方法として、肛門から薬剤を挿入する方法があります。5ASA・ステロイドの坐剤・液体製剤・泡状製剤を使い分けています。



ステロイド : 短期的に用いれば、副作用少なく、症状をコントロール可能です。長期に服用するのではなく、短期的使用にとどめることが重要です。

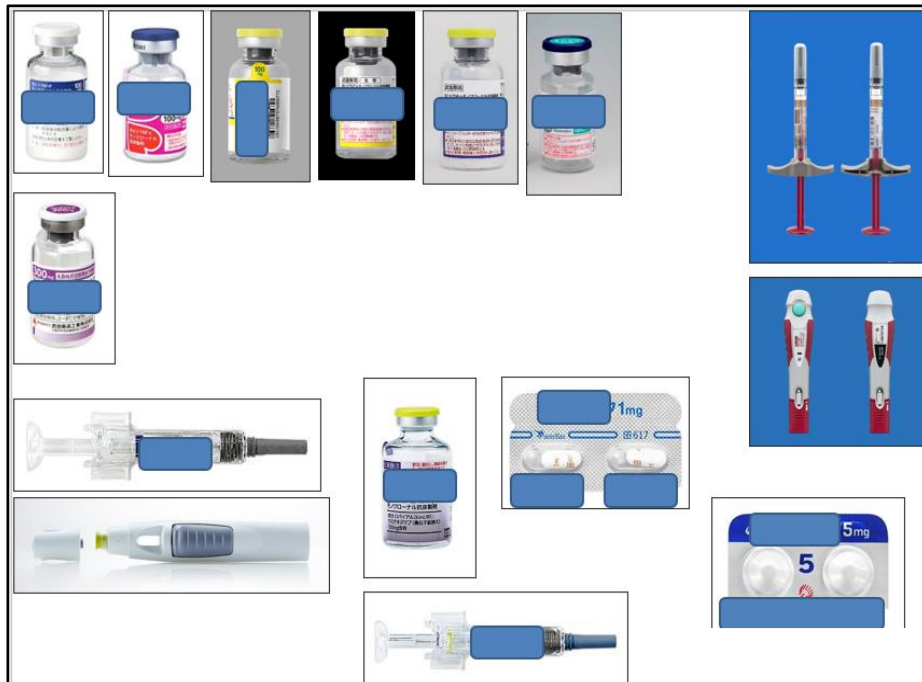


免疫調節薬：ステロイド剤で改善した体調を維持するために内服します。採血検査で、投与前に副作用予測が可能となりました(NUDT15 遺伝子)ので、安全性も確保しながら投与が可能となりました。



生物学的製剤：注射で用いる薬剤で、腸に傷をつける体の作用を特異的に制御します。抗 TNF- α 抗体製剤 3 種類、抗 IL12-23p40 抗体製剤、抗接着因子製剤を使い分けています。

免疫抑制薬：重症の患者さんに内服で使い、白血球の働きを制御することで、腸の潰瘍を改善することができます。血中濃度を測定しながら、投与量の調整をしています。新規に使用可能となった JAK 阻害薬も使用しています。



白血球除去療法：週に 1-2 回、1 回 1 時間程度、血液をフィルターで浄化し戻します。腸に傷をつける白血球の数と質をコントロールすることで症状を回復させます。時間的制約のある患者さんの場合は、血液浄化療法を専門とする医療機関と連携して治療を行った実績があります。



手術療法：内科的治療が奏功しない例では、金沢大学附属病院と連携して治療を行っています。希望のある患者さんでは、症例の多い県外の医療機関に紹介して治療を行った実績もあります。

上記の治療を、重症度に合わせて、またライフスタイルに合わせて、相談しながら決定していきます。

また、日々の生活については同じ疾患の患者さんとの情報交換も有効です。

石川県患者会 IBD 「いしかわ IBD 結の会」 へのリンク <http://yuinokai.info/>